



TITLE:

戦後ノ人口増加政策(一)

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 戦後ノ人口増加政策(一). 経済論叢 1916, 3(2): 53-66

ISSUE DATE:

1916-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127069>

RIGHT:

京都帝國大學法學科大學

經濟論叢

大正五年八月一日發行

第二號

第三卷

論說

國防税ノ本質

でがゐつぎ・ひゆーむノ經濟學說(四)

資本ノ眞概念ノ發展(二)

戰後ノ人口増加政策(二)

支那近代ノ戸口ニ就テ(三完)

在外正貨ト兌換券ト關係ヲ論ズ

雜錄

服部氏ノ批評國際經濟論ニ對スル向井氏ノ批評

瀧本誠一氏ノ草稿危險ニ對スル解題ニ就イテ

福田博士ニ答フ

戰時利得税ノ諸學說及實例

英吉利ノ新税

米國ニ於ケル船舶買收法案ニ就テ

經濟雜誌第五

統計書ノ概說

らぐれー「ミール」學說ノ研究(三)

『通俗經濟文庫』ノ刊行

『經濟大辭書』ノ完成

法學博士 神戸 正雄

法學博士 福田 德三

法學博士 河上 肇

文藝博士 米田 庄太郎

法學博士 内藤 虎次郎

法學博士 小川 郷太郎

法學博士 河上 肇

法學博士 鈴木 券太郎

法學博士 本庄 榮治郎

法學博士 神戸 正雄

法學博士 河田 嗣郎

法學博士 岸本 熊太郎

法學博士 田島 錦治

法學博士 財部 靜治

商學博士 大塚 金之助

法學博士 福田 德三

法學博士 神戸 正雄

(載 轉 禁)

戰後ノ人口増加政策（二）

米田庄太郎

一

余ハ目下ノ大戰亂終了後少クモ佛獨ノ二ヶ國ニ於テハ人口増加問題ハ甚ダ重要ナル國民的大問題トナルデアラウト考ヘテ居ル。恐クハ英國ニ於テモ同様デアラウト信ズル。而シテ余カ此ノ如クニ考ヘル主要ナル根據トナスモノハ左ノ三事項デアル。

1 戦争前ニ於ケル此等諸國ノ人口出生率減少ノ傾向、

2 目下ノ大戰争ニヨリテ此等諸國ノ受クル人口上ノ損害ノ甚ダ大ナルコト、

3 戦後人口ノ自働的恢復ガ殆ンド不可能ト思ハルルコト、

サレバ之レヨリ先ヅ此等ノ三問題ヲ論究シテ、余ガ何故ニ此等ノ諸國ニ於テ戦後人口増加問題ハ甚ダ重要ナル國民的大問題トナルト考ヘルカヲ簡單ニ辯明シテ置カウト思フ。

二

却説戦争前現代文明國ニ於テ人口出生率ガ段々減少スル傾向明カニ現ハレ來レルコト、殊ニ此傾向ガ現代文明ノ尤モ進歩セル諸國ニ於テ、尤モ著シク現ハレテ居ツタコト、及ビ其ノ尤モ重要ナル直接原因ハ、人工避妊デアアルコト等ニ就テハ、余ハ既ニ諸雜誌ニ於テ公ニセル幾多ノ論文ニ於テ詳シク論述シテ置イタカラ、茲ニ改メテ再ヒ論述スルコトヲ避ケルガ、要スルニ現代文明國

ニ於テハ假令目下ノ大戦争ガ起ラナカツタトシテモ、人口出生率ガ段々減少スル結果、段々人口増加率ノ減少ヲ起シ、遂ニハ人口ハ停滞シ、更ニ進ンデ減少スル傾向アルコトハ明ラカニ豫想サレタノデアル。随フテ人口維持問題或ハ増加問題ハ近來大ニ世ノ識者ノ注意ヲ惹起シテ居ツタノデアル。而シテ人口出生率減少ノ尤トモ重要ナル直接原因ト認メラルル人工避妊ハ戰後ニ至ツテモ果シテ減弱スルデアラウカ、ドウカハ甚ダ不確實デアル。或學者ハ戰後ハ人口ノ急激ナル減少ノ結果、勞働ノ不足ヲ生ジ、俸給賃銀共ニ昂騰スルカラ、中等階級及ヒ勞働者階級ノ生活ガ餘程豊カニナリ、随フテ人工避妊ハ自カラ大ニ減弱シテ出生率ハ増加シテクルデアラウト考ヘテ居ル。是レ決シテ有得ベカラザルコトデハナイ。或ハソウナルカモ知レナイ。而モ近來現代文明國ニ於テ避妊ノ盛ンニ行ハレ來レル所以ヲ深ク探究シテ見ルト、夫レハ單ニ生活ノ困難ト云フガ爲メデハナク、寧ロ益々自己又ハ家族ノ文化的活動及ビ文化的享樂ヲ増進セシメンガ爲メカ、又女子ガ妊娠及ビ出産ノ危險ヤ苦痛ヲ避ケ又ハ減少セシメントスルガ爲メデアルコトガ發見サレルノデアル。サレバ若シ單ニ生活ノ困難ト云フコトガ主要原因トナツテ、近來避妊ガ盛カンニ行ハレテ來タノデアルナラバ、戰後論者ノ云フガ如キ理由ニヨリテ、避妊ハ自カラ減退シ出生率ハ増加スルカモ知レナイガ、併シ余ノ考フルガ如キ事情ガ避妊増進ノ主要原因デアルトスルナラバ、假令戰後論者ノ云フガ如キ經濟狀態トナツテモ、避妊ハ自カラニ減退スルコトハアルマイ、否夫レガ爲メニ却ツテ避妊ガ益々増加シテ出生率ガ一層減少スルニ至ルカモ知レナイト考ヘルコトモ出來ル。サレバ假令論者ノ云フガ如キ經濟狀態ガ戰後發達スルトシテモ、避妊ヲ減退セシメ、出生率

ヲ増加セシムル爲メニハ、國家ハ特別ナル政策ヲ行ハネバナラナイノデ、其ノ儘ニ放任シテ置ケバ決シテ其目的ヲ達スルコトハ出來マイト思フ。

三

目下ノ大戰爭ニヨリテ交戰國民ガ如何程ノ人口上ノ損害ヲ受ケルデアラウカハ、今日ヨリ之ヲ正確ニ豫測スルコトハ殆ンド不可能デアアル。當ニ今後ドレ程戰爭ガ繼續スルカハ豫知シ難イノミナラズ、今日マデニ受ケシ人口上ノ損害モ正確ニ測定スルコトハ甚ダ困難デアアル。英國ノ如キハ時時戰死者負傷者及ビ行方不明者ノ總數ヲ發表シテ居ルガ、併シドレホド信用シ得ラルルモノデアアルカハ不確實デアアル。獨逸ハ戰死者負傷者等ノ表ヲ規則的ニ發表シテ居ルガ、併シ新聞紙上其ノ總計ヲ計算シテ公ニスルコトハ嚴禁サレテ居ル、而シテ丁抹ヤ和蘭ナドノ新聞ハ其總計ノ計算ヲ試ミテ之ヲ公ニシテ居ルガ、之レモドレホド正確デアアルカハ知レナイ。更ニ佛國ニ至ツテハ其死傷者ヲ全ク發表シナイ。ソレデ今日マデノ戰死傷者ニ就ラモ今日正確ナル數ヲ知ルコトハ殆ンド不可能ニシテ只種々ノ方面ヨリ試ミラレタル推算ニヨリテ、其ノ一般ヲ推算シ得ルバカリデアアル。

今英國政府ノ發表セシ處ニヨルト開戰後本年一月九日ニ至ルマデノ損失ハ五十四萬九千五百六十七人ニシテ内戰死者ノ數ハ十二萬八千一百三十八人デアアル。次ニ獨逸ノ損失ニ就テハ本年一月ニ佛國ノ諸新聞ハ瑞西ノ赤十字社ノ計算セル處ニヨルト獨逸ノ死傷者ハ負傷者百八十五萬人戰死者百六十三萬人ナルヲ報ジタ。併シ此報道ノ正確デナイコトハ負傷者ト戰死者トノ數ノ比例ヲ見テモ直チニ推察サレルノデアアル。而シテ英國ノ陸軍大臣ガ議會ニ報告シタ處ニヨルト、開戰後昨年十二月三十一日ニ至ルマデノ獨逸ノ損失全體ハ二百五十三萬五千七百十八人ニシテ、内戰死者并ニ負傷ノ結果死亡セルモノハ六十一萬三千六十六人デアアル。同大臣ハ此統計ハ最新ナ又尤トモ信用シ得ラルル材料ニ基ツケルモノデアアルト云フテ居ルガ、果シテ然ルヤ否ヤハ判斷シ難

イガ、トニカク戦死者并ニ負傷ノ結果死亡セル者ノ總數ハ六十一萬三千六十六人デアルト云フコトハヤヤ眞實ニ近い様ニ思ハレル。ト云フノハ米國ノ參謀本部ノ調査トシテ傳ヘラルル統計ニヨルモ同期間ノ獨逸ノ死者ノ總數ハ五十八萬人ト計上サレテ居ルカラデアアル。然ラハ佛國ノ損失ハ如何程デアラウカト云フニ、右ノ米國參謀本部ノ調査ト稱セラルル統計エヨルト開戦後昨年十二月末日マデノ佛國ノ死傷者總計ハ二百萬人ニシテ内死者八十萬人トナツテ居ル。然ルニチービ氏ハ種々ノ方面ヨリ調査シテ五十萬人ハ越ヘナイデアラウト論斷シテ居ル。若シ獨逸ノ死者チ六十萬人グラヒト見ルナラバ佛國ノ死者ハチービ氏ノ考ヘラルル如ク五十萬人チ越ヘナイト見ル方ガ或ハ懸當カト思フ。ト云フノハ佛國軍ノ戦線ハ獨逸軍ノ戦線ヨリモ遙カニ短イカラデアアル。

Charles Gide, La reconstruction de la population française, Revue internationale de sociologie, mars, 1916.

右ハ昨年末マデノ大體上ノ推察デアアルガ、其後々々なるだんノ大激戦ガ始マリ今尙ホ繼續シテ居ルカラ、獨逸及ヒ佛國ノ戦死者ノ數ハ大ニ増加シテ居ラウト思フ。更ニ今後戦争ガ終ルマデニ如何ナル激戦ガ起ルカモ知レナイカラ、戦争ノ全ク終ルマデニハ戦死者ノ總計ハ非常ナ數ニ達スルデアラウト思フ。サレバ目下ノ大戦争ガ直接ニ人口ノ上ニ加フル損害ハ既ニ甚大ナルモノデアアルガ、更ニ間接ニ加フル損害モ亦大ナルモノデアラウト推察サレルノデアアル。

先ヅ戦場ニ於ケル病死者及ビ負傷ノ結果死亡スルモノニ就テ考ヘテ見ルニ、以前ノ戦争ニ於テハ此種ノ死亡者ノ數ハ甚ダ大ナリシモノニテ、くりみあ戦争ノ際ニハ病死者ノ戦死者ニ對スル割合ハ四倍餘デアツタ。尙ホ日露戦争ノ際ニ於テモ、露軍ニ於テハ戦死者一人ニ對シテ病死者三人ノ割合、日本軍ニ於テハ戦死者一人ニ對シテ病死者二人ノ割合デアツタ。幸ヒニ今回ノ大戦争ニ於テハ病死者ノ割合ハ大ニ減少シテ居ル。罹病者百人ニ對シテ病死者ハ二人餘ニシテ、而シテ負傷者ニ對スル負傷ノ爲メニ死亡セルモノノ割合ハ一層少ナイト云フコトデアアル。併シ假令其割合ガ大

ニ減少シテ居ツテモ、何分古今未嘗有ノ大軍ガ出征シテ居ルコトデアルカラ、病死者負傷死亡者ノ絶對數ハ可也大數ニ達スルデアラウト思フ。更ニ敵國ニ捕虜トナレルモノノ營養狀態及ビ衛生狀態ノ不良ナルガ爲メニ死亡スルモノノ多キコトモ計算ニ入レネバナラス。

終リニ戰爭ガ間接ニ人口ノ上ニ加フル損害トシテ、目下ノ戰爭中ニ於ケル各交戰國ノ普通死亡率ヲ考察セネバナラス。今佛國ヲ例トシテ戰爭中ニ於ケル普通死亡率ノ變動ヲ考察シテ見ルト、普佛戰爭ノ起レル千八百七十年及同七十一年ノ二ケ年ノ普通死亡數ハ二百三十一萬八千人デアルガ、若シ戰爭前年ノ死亡率ニヨリテ計算スレバ其ハ百七十二萬八千人デアル可キ筈デアル。シテ見ルト平常ノ普通死亡數ニ超過セル五十九萬人ト云フ數ハツマリ戰爭ノ影響ニヨルモノト推察セネバナラス。而シテ普佛戰爭ハ僅カニ六ケ月間繼續セシダケデアルコトヲ考フルトキハ、戰爭ガ間接ニ死亡ノ上ニ及ボス影響ノ大ナルハ實ニ驚ク可キモノデアル。尙ホ此戰爭ニ於テ佛軍ノ戦死者ハ十五萬人ニ達シナカツタノデアルカラ、此戰爭ガ間接ニ人口ノ上ニ加ヘタル損害ハ直接ニ加ヘタル損害ニ殆ンド四倍スルノデアル。而シテ此ノ間接ニ戰爭ガ人口ノ上ニ及ボス影響ハ何レノ戰爭ニ就テ見ルモ一般ニ認メラレルノデアアルガ、更ニ注意ス可キコトハ此ノ影響ハ單ニ交戰國民ノミニ限ラズ、彼等ニ接近セル中立國民ノ上ニモ及ンデ居ルコトデアル。例ヘハ右ノ普佛戰爭ノ起レル年ニハ、瑞西ノ死亡率ハ百分ノ四十、和蘭ノ死亡率ハ百分ノ五十七増加シテ居ルモノデアル。而シテ佛國ノ死亡率ノ増加ハ百分ノ三十四デアツタコトヲ考ヘルト、其等ノ中立國ガ間接ニ右ノ戰爭ノ影響ニヨリテ受ケタ人口ノ上ノ損害ハ交戰國民ノ夫ヨリモ大ナルコトヲ發見スルノデアル。今回

ノ大戰爭ニ於テモ中立國ノ死亡率ガ同様ナ影響ヲ受ケルデアラウカ、是レ人口問題ノ研究上甚ダ注意スヘキ、又甚ダ興味深キ問題デアルノデアアル。Hersch, La mortalité chez les neutres en temps de guerre, 1915. ちトニ氏論文ニ引用)

今目下ノ大戰爭ニ於テ戰場トナレル諸國ノ地方、即チ白耳義、佛國ノ北部、リつあにあ、波蘭せるびあ等ノ人民ニ於テ戰禍ニヨリテ死亡率ノ大ニ増加セルコトハ察スルニ餘アルガ、然ラザル地方ニ於テモ物價ノ騰貴、生活必要品ノ減少、醫師及ビ藥料ノ缺乏等ニヨリテ死亡率ガ平常以上ニ増加セルコトモ亦推察セラレルノデアアル。獨逸ノ如キモ別ニ直接ニハ戰禍ヲ蒙ツテ居ラナイガ、併シ經濟的ニ封鎖サレテ居ル結果、種々ナル必要品ハ缺乏ヲ生ジ、結局死亡率ハ平常以上ニ増加シテ居ラウト推察サレルノデアアル。

要スルニ普佛戰爭ハ只僅カニ六ヶ月間繼續セルダケデアルノニ、佛國ノ普通死亡數カ戰死者ノ四倍程増加シタトスレバ、目下ノ戰爭ガ九二年間或ハ夫レ以上ニ繼續スルトスレバ、普通死亡率ノ増加ノ割合ハ夫レ以上ニ達スルコトハ疑ハレナイ。併シ假リニ其ノ割合以上ニハ増加シナイトシテモ、實ニ驚ク可キ數ニ達スルデアラウト思フ。而シテ夫レハ單ニ佛國ニ限ルコトデナク、他ノ交戰國全體ニ於テモ同様デアルト思ハレルカラ、其等ノ諸國ニ於テモ目下ノ戰爭ノ間接的影響ニヨリテ與ヘラレル人口上ノ損害ハ實ニ大ナルモノデアラウト思フ。

尙ホ戰爭ノ間接的影響ニヨリテ起ル人口上ノ損害ニ付テ注意ス可キモノガアル。夫レハ青年及ヒ壯年ノ男子ガ出征シテ居ルガ爲メニ女子ノ妊娠割合ノ大ニ減少シテクルコトデアル。モツトモ

此點ニ就テハ獨逸ノ政府モ佛國ノ政府モ近來大ニ注意ヲ拂ラヒ、時々軍人兵士ニ休暇ヲ與ヘテ歸家セシムルト云フコトデアル。サレバ之レニヨリテ妊娠割合ノ減少ハ從來ノ戰爭ニ於テ見ルホドニハ達シナイカモ知レナイ。而モ餘程大ナル度合ニ於テ妊娠割合ノ減少スルコトハ疑ハレナイト思フ。

以上述べシ處ニヨリテ察セラルル如ク、目下ノ大戰爭ガ直接間接ニ各交戰國ノ人口上ニ加フル損害ヲ總計スレバ甚大ナルモノト思ハレル。サレバ佛獨英ノ諸國ニ於テ、假令戰爭前ニ出生率減少ノ傾向ガ發達シテ居ラナカツタトシテモ、戰後其損失ヲ補充スルコトハ容易ナ業デナイ、之レガ爲メニハ種々ナル政策ヲ施行スルコトガ必要デアルト思ハレルノデアル。

四

然ルニ、戰爭ニヨリテ受クル人口ノ損失ハ如何ニ大ナルニセヨ、戰後其ノ損失ハ自然的自働的ニ恢復セラレ、數年ヲ經ズシテ人口ハ亦モトノ水平線ニ歸ルト論ズル人々ガアル。而シテ若シ此等ノ人々ノ主張スルコトガ、眞實デアルトスレバ、目下ノ戰爭ニヨリテ交戰國ノ受クル人口の損失ガ如何ニ多大デアツテモ、其損失ハ別ニ人爲のニ策ヲ講ジナクトモ、數年ヲ經ズシテ自カラモトノ數ニ歸ルノデアル。隨フテ戰後ニ於テモ人口増加問題ナドヲ起シテ騷キ立テル必要モナク、又實際世人ハ別ニ此カル問題ニ注意ヲ拂ハナイデアラウト考ヘラレルノデアル。サレバ今余輩ノ如ク戰後人口増加問題ガ重要ナル國民的大問題トナルデアラウト考ヘルニ於テハ、上述ノ如キ人口ノ自働的恢復ガ少クモ今回ノ戰爭後ハ起リ得ナイコトヲ論證シナケレバナラス。此問題ニ就テハ余

ハサキニ公ニセル論文ノ中ニモ少シク論述シテ置イタガ、上ニ引用セルギン氏ノ論文中ニハ一層詳しく愚見ト同様ノ主旨ヲ論述サレテ居ルカラ、茲ニ同氏ノ説ヲモ參考シナヤヤ詳しく再ビ愚見ヲ論述シテ置カウト思フ。

戦後人口ノ自働的恢復ヲ説ク、或ハ信ズル人々ノ中ニハ、單ニ自然ハ自カラ自分ノ損傷ヲ補充スルト云フ單純ナル信仰ニ依據スル人々ガアル。彼等ノ論ズル處ニヨレバ、生物ノ負傷ガ自然ニ治療セラレ、又森林ノ樹木ヲ斬伐スレバ若木ハ一層强健ニ又迅速ニ生長シテ、間モナクモトノ森林ヲ充タスト同ジ自然ノ法則ニ從フテ、人口ハ斷ヘズ増進シテ居ルノデアルカラ、戦争ニヨリテ一時此増加力ガ中止サレテモ、戦後再ビ活動シテ人口ハ間モナクモトノ水平線ニ歸ヘルノデアル。論者ハ更ニ以前ノ戦争後ニ於ケル人口運動ノ統計ニヨリテ此法則ヲ論證セント試ミテ居ル彼等ハ尙ホ一步進メラ戦争中又ハ戦争後ハ特ニ男子ノ出生率ガ増加シテ、巧妙ニ戦時ニ於ケル男子ノ損失ヲ補充スルモノデアルト論ジ、自然ノ作用ノ巧妙ナルヲ讚賞シテ居ル。併シカクノ如キ樂天的自然主義ノ信仰ヲ抱カナイ論者ハ、大戦争後出生率ノ大ニ増加スル所以ヲ、需要供給ノ法則ノ上カラ説明セント試ミテ居ル。ツマリ彼等ハ戦争ニヨリテ人口ノ減少スルコトハ人間ノ價格ヲ増加スル、而シテ賃銀ハ上騰シ、就職ノ口ガ易ク得ラレ、又易ク結婚スルコトガ出來ル様ニナル、此クテ人間ノ生産ガ奨励セラレ、出生率ガ大ニ増加シテクルト論ズルノデアル。先ツ此點カラ評論シ始メルガ、今需要供給ノ法則ヲ應用シテ戦後自然的ニ人口ノ増加スル所以ヲ説明セントスル説ハ一見眞實ラシク思ハルガ、實ハ粗雑ナ考ヘデアル。成程戦後男子ノ數ガ大ニ減少スルガ爲メニ其ノ價格ハ増加スルト云ヒ得ラレル。併シ是レト同時ニ女子ガ餘ツテ其價格ハ減少スル

ト考ヘテバナラヌ。サレバ此場合ニ若シ人々が熟慮的計畫的ニ子ヲ造ルトスルナラバ大ニ躊躇シナケレバナラナクナル。何ントナレバ、男子ガ生マルレバヨイガ、若シ女子ガ生マルルトスルト一層困難ヲ増加スルコトニナルカラデアル。併シ男子ガ生マルルカ、女子ガ生マルルカハ、勿論何人モ豫知スルコトハ出来ナイ。ソコデ結局子ヲ造ラナイコトニナルデアラウ。サレバ戦後ノ人口運動ガ若シ單純ニ需要供給ノ法則ニ支配サレルト考フルトキハ、人口ハ増加スルヨリモ寧ロ一層減少スル恐れガアルト云ハチバナライノデアル。

次ニ戦後出生率ノ増加ヲ示ス統計ニヨリテ人口ノ自働的恢復ヲ論證セントスル企ダテニ就テ考察センニ、ぢーど氏ハ上ニ引用セル論文ニ於テ從來ノ戦争ノ場合ニ就テモ此論證ヲ否定セントスル様デアル。而シテ氏ハ其ノ論據トシテ普佛戦争後ニ於ケル佛蘭西ノ人口動態統計ヲ利用シテ居ル。氏ノ議論ハアマリ充分デナク、徹底シテ居ラナイト思フガ、併モ余ハ氏ノ説ニヨリテ、余ガ今回ノ戦争カ人口ノ上ニ及ボス影響ニ付テ豫ネテ抱イテ居ツタ、又既ニ二三ノ新聞ヤ雜誌ニ於テ發表セル愚見ガ一層確カメラレタト考ヘルノデアル。而シテ余ノ愚見ト云フハ、ツマリ從來ノ戦争ニ就テハ、戦後交戦國ノ人口ガ多年ヲ要セズシテ自然的或ハ自働的ニ恢復スル事實ヲ一般ニ認メルコトガ出来ルガ、併シ今回ノ戦争ニ於テハ少クモ佛獨英等ニ於テハ此事實ハ現ハレナイデアラウト云フノデアル。而シテ余ハ其ノ論據トシテハ、此等諸國ニ於テハ戦争前ヨリシテ人口出生率ノ減少ガ著シク現ハレテ居ツタコトト、今回ノ戦争ニヨリテ此等ノ諸國ノ受クル人口の損害ノ甚大ナルコトノ二者ヲ擧ゲテ居ツタノデアル。然ルニ余ハぢーど氏ノ説ヲ批評的ニ考察スル爲

ニ、普佛戰爭後ノ獨佛ノ人口動態ヲ吟味スルニ當テ、假令今回ノ戰爭ガ與フルガ如クニ人口の損害ノ大ナラザル戰爭ニアリテモ、人口出生率ガ既ニ規律的ニ減少ヲ始メテ居ル國ニ於テハ、戰後人口ノ自然的恢復ハ甚ダ困難ニシテ、之レガ爲メニハ多クノ年月ヲ要スルコトヲ發見シタノデア。普佛戰爭ハ僅カニ六ヶ月間繼續シタダケデ、而シテ佛國ノ戰死者ハ十五萬人ニ達シテ居ラナイガ、然ルニ數十年前ヨリ規律的ニ出生率ノ減少シテ居ツタ佛國ニ於テハ、人口總數ガ戰爭前ノ狀態ニ恢復スル爲メニハ十數年ヲ要シタノデア。是ニ由リテ見レバ、既ニ人口出生率ノ減少シテ居ル國ニ於テハ、假令其ノ戰爭ニヨリテ蒙ル人口ノ損害ガ、今回ホド大ナラザルモ、戰後自然的ニ人口ノ恢復スルコトガ、如何ニ困難デアルカハ察セラレ。而シテ今回ノ交戰國ニ於テハ、獨逸モ英國モ何レモ近來出生率減少ノ傾向ガ著シク現ハレテ居ル國デア。サレバ此等ノ諸國ニ於テモ、假令今回ノ戰爭ニヨリテ蒙ル人口の損害ガサホド大ナラヌトシテモ、戰後ハ普佛戰爭後佛國ニ於ケルト同様ニ、人口ノ自然的恢復ハ甚ダ困難デアラウト思ハレルノデア。然ルニ之レニ加ヘテサキニ述ベシ如ク今回ノ戰爭ノ與フル人口の損害ガ非常ニ大ナルモノデアラウト推察サレルニ於テハ、戰後此等ノ諸國ニ於ケル人口ノ自然的恢復ハ假令不可能デハナイトシテモ甚ダ困難ニシテ多クノ年月ヲ要スルコトデアラウト思フ。小川教授モ「まるさす記念號」ニ於テ發表サレタ有益ナル論文「歐洲戰後ノ人口」ノ中ニ左ノ如ク云ハレテ居ル。

此產兒力ノ衰ヘタ時ニ當リテ戰爭ガ起リ無暗失鱈ニ人ヲ殺シ人口ニ缺陷ヲ生ジテ居ル、戰後ニナリテ產兒力ハ多少大トナリテ來ルカモ知レヌケレドモ、慢性病トナリテ居ルモノガ急ニ面目ヲ改メルト云フコトハ到底信ンズルコト出來ヌ、……

是ニ由テ之ヲ觀レバ、戰後ノ人口ハ戰前ヨリモ大ニ減少ス可ク之ヲ放任スルトキハ、急ニ恢復シナイモノデアルト斷ゼテバナラヌ」

然ルニ戰後經濟上其他ノ諸方面ノ活動ニ於テ、英獨佛ノ諸國ガ戰爭前ノ地位ヲ維持センガ爲メニハ、大ニ人口ヲ恢復セネバナラナイノデアアル。是ニ於テカ、余ハ戰後此等ノ諸國ニ於テハ人口増加問題ガ甚ダ重要ナル國民的大問題トシテ取扱ハレ、人口増加ノ目的ヲ達スル爲メニ種々ナル政策ガ行ハルルデアラウト考ヘルノデアアル。

尙ホ戰爭中又ハ戰後ノ數年間ニ於テ男子出生ノ女子出生ニ對スル割合ガ大ニ増加スルト云フ說ニ付テ一言シテ置キタイガ、此說モ或意味ニ於テハ眞實デアルト認メ得ラレル。併シ其主張者ノ考ヘルホド確實ナモノデナイト思フ。今回ノ戰爭中ハ如何ニナツテ居ルカ、マタ千九百十五年ノ人口狀態ヲ詳シク知ルコトハ出來ナイガ、ばり市ノ發表セル統計ニヨルト女子出生百ニ對スル男子出生ノ割合ハ百三ニシテ、平常ノ割合ヨリハ却テ減少シテ居ルコトヲ見ルノデアアル。但シ平常ノ割合ハ百ニ對スル百五デアルノデアアル。又戰後ノ形勢ヲ日露戰爭後ノ我國ニ付テ考察スルニ左表ノ如クデアル。

女百ニ付男	
明治三十五年	一〇四・八五
同 三十六年	一〇五・二一
同 三十七年	一〇五・一四
同 三十八年	一〇二・六七
女百ニ付男	
明治三十九年	一〇八・六六
同 四十年	一〇二・七三
同 四十一年	一〇四・六三

右ノ表ニヨリテ見ルト、戰爭中ハ女子出生ニ對スル男子出生ノ割合ハヤハリ平常ノ割合ニ比シテ大ニ減少シテ居ル。併シ戰後ノ第一年明治三十九年ニハ之レニ反シテ大ニ増加シ一〇八、六六トナツテ居ル。而シテ我國ノ統計家モ之ヲ以テヤハリ戰後男子出生ノ大ニ増加スルト云フ一般の法則ヲ證明スルモノノ如ク論ンジテ居ルガ、併シ。明治三十九年ハ丙午ノ歲ニシテ故意ニ出生届出ヲ怠リシモノガ少ナクナイト思ハレルカラ、同年ノ統計ニ現ハレタダケノ事實ニヨリテハ同年ノ出生狀態ヲ正確ニ推察スルコトハ出來ナイ。ヤヤ正確ニ其狀態ヲ推察センニハ宜シク其翌年四十年ト合セテ其平均ヲトル可キデアル。然ルニ四十年ニ於ケル男子出生ノ割合ハ三十八年戰爭中ノ夫レト同様ニ平常割合ヨリ大ニ少ナイ、即チ一〇二、七ニデアル。ソレデ今三十九年ノ一〇八、六八ト四十年ノ一〇二、七三トヲ合セテ其平均ヲ求メルト一〇五、七〇トナルノデ殆ンド平常ノ割合ト同様デアツテ何等男子出生ノ増加ヲ示シテ居ラナイ。即チ戰爭中損失セル男子ノ割合ヲ恢復シテ居ラナイ。否ナ戰爭中ニ於ケル男子出生割合ノ減少スラモ恢復シテ居ラナイ。結局戰爭ノ影響ニヨリテ男子ノ割合ガ減少シタコトニナツテ居ルノデアル。

五

却説余ハ以上述べ來リシ理由ニヨリテ、戰後少クモ佛獨或ハ又英國ニ於テモ、人口増加問題ハ甚ダ重要ナル國民的大問題トシテ取扱ハレ、人口増加ニ關スル種々ナル政策カ立ラレルデアラウト推察スルノデアアルガ、然ラバ實際ニ於テ如何ナル政策ガ行ハレルデアラウカ。今日ヨリシテ之ヲ確實ニ豫見スルト云フコトハ、モトヨリ困難デアアルガ、併シ若シ眞面目ニ該政策ヲ實行スル

トスレバ、大體上如何ナル方針ヲ立テルデアラウカハ、敢テ推察シ難イコトハアルマイト思フ。ト云フノハ開戦前ヨリシテ此問題ハ既ニ佛蘭西ノ學者ノ眞面目ニ講究シテ居ツタモノデ、彼等ハ少クモ實行シ得ラルル大體上ノ方針ハ見定メテ居ツタト思ハレルカラデアル。近來獨逸ノ學者モ大ニ此問題ニ注意シ始メ、殊ニ開戦後人口増加ノ政策ニ就テ種々講究シテ居ル様デアル。然ルニ今日マデ余ガ獨逸ノ雜誌ヤ著作ニコリテ學ンダ處デハ、既ニ佛蘭西ノ學者ノ論ンジテ居ル以外ニ別ニ新シキ政策ヲ説イテ居ル人ハナイ様ニ思フ。ソレデ余ハ本論文ニ於テハ主トシテ佛蘭西ノ學者ノ説ヲ講究シ、之レニ附ケ加ヘテ獨逸ノ學者ノ説ヲ論究スルコトスル。

六

近來佛國ニ於ケル出生率減少ノ傾向ハ益々激シクナリ、啻ニ増加率ノ減少スルノミナラズ、遂ニ人口ノ絶對的減少ヲモ起セシコトスラアルヲ以テ、識者ノ間ニハ、假令今ヨリ以上ニ大ニ増加セシムルコトハ不可能デアルトシテモ、少クモ現狀ヲ維持スル爲メニ眞面目ニ色々ナ策ヲ講ズル人々が續々現ハレテ來タ。又色々ナ團體モ起ツテ來タ。而シテ開戦前ニ於テ人口維持策ヲ殊ニ眞面目ニ講究シテ其ノ所見ヲ發表シ、以テ國民ノ注意ヲ惹起シ、又其實行ヲ圖ラント努力シテ居ツタ學者ハばゝる、るるあばゝりゆあ及ビじつやく、べるちよんノ二氏デアル。又此等ノ學者ノ説ニ刺戟セラレ、又ハ彼等ニ指導セラレテ、種々ナル團體ガ起ツテ居ツタガ、其ノ重ナルモノヲ舉グヤバ左ノ如クデアル。

1. L'Alliance nationale pour l'accroissement de la population française, fondée en 1895 par M. le Dr Jacques Ber-

tilion, president; M. André Homorat, député etc.

2. Comité des revendications des pères de famille nombreuse, crée en 1906 à Montpellier.

3. L' Union des familles nombreuses de Levroux (Indre), fondée en 1898.

4. La Ligue des pères et mères de la famille nombreuses, fondée en 1908 par M. le Capitaine Simon Maire.

而シテ此ノ外人口減少ヲ防止セントスル目的ノ上ニ、慈善又ハ相互補助ノ目的ヲ兼有スル幾多ノ協會ガアル。其ノ主要ナルモノハ左ノ如クデアル。

1. Famille Montpelliéraine, fondée en 1894.

2. L'Union des familles de l' Eure, fondée en 1899.

3. Union des familles d'Evreux, fondée par N. Alépéc.

4. Union des pères de famille méritants à Arles (13^{ème}), fondée en 1904.

5. L'Alliance départementale de pères de famille nombreuse du Gard, fondée en 1907.

6. L'Union des pères de famille de Châlons-Sur-Marne, fondée en 1908.

尙ホ其ノ他幾多ノ小團體ガアツテ、人口減少ノ傾向ヲ防止セント努力シテ居ツタガ、茲ニ一カ列擧スル必要ハナイト思フ。只以上述ベシ處ニヨリテ、開戦前ニ於テモ既ニ佛國ノ識者ハ如何ニ人口減少ノ傾向ノ禍害ヲ覺ツテ、其防止ニ努力シテ居ツタカヲ示スニ止メテ置ク。而シテ戦後此等ノ諸團體ハ一層盛ンニ活動ヲ起スデアラウト推察サレルノデアル。然ラバ彼等ハ大體上如何ナル方針ニ於テ其ノ目的ヲ達セント勉メルデアラウカ。余ハ先ヅ開戦前ニ於テ、尤トモ熱心ニ人口維持策ヲ講究シ、又之ヲ主張シテ居ツタるるあ、ばしりゆあ、及ビべるちよんノ二氏ノ説ヲ研究スルコトニヨリテ之ヲ學ブトガ出來ルト信ズル。ソレデ茲ニ先ヅ此等二氏ノ説ノ大要ヲ述ベ次ニ開戦後如何ナル新説ガ現ハレテ居ルカラ調ラベテ見ヤウト思フ。